

---

# やりっぱなし短編集

T m

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

やりっぱなし短編集

### 【著者名】

ZZード

ZZ3338Z

### 【作者名】

Tm

### 【あらすじ】

読みたいけど書き続ける自信が無いので短編にしちゃったお話を投下するところです。作者の偏った趣味がまるわかり。やりっぱなしなので続きませんが一応一話完結として仕上げてあります。お暇潰しに是非つまんでやってください。

現在三話

### 【王妃様と僕 異世界トリップ 小姓×王妃】

【激烈毒舌乙女、甘いものを拒絶するー 異世界トリップ ファー

### ストキス喪失】

【アモルの矛先 異世界トリップ －B－の橋渡し？】  
気まぐれ更新です。

## 王妃様と僕 【異世界トリップ 小姓×王妃】（前書き）

要は男主人公が王妃様の下僕として地味に頑張る様を読みたいといつ話。

運命など、無い。誰某に決められた物事など、感知できなければそうとは言い切れないし、できたところでそれはただの決まり」とでしかない。

そもそも運命とは何なのだろうか。ドラマティック、陳腐、付加価値。それ以上の意味などあるのだろうか。例えはそれが抗うことのできない決定事項だとして、されど決めることに何の意味があるのだろう。抗うことに、何の意味があるのだろう。それによつて、誰が、何が、どういった対価を手に入れるのだろう。

そしてそれはそんな風にして他者を縛り付けてしまうほどの価値が、本当にあるのだろうか。誰も知らない。きっと、誰も、知りえない。

見渡す限りの青葉が萌える、丘陵。更にその向こうには鬱蒼と生い茂る青々とした林が連なり、空を仰げば立派な入道雲と燐燐と輝く太陽とが寄り添うようにしてそこにある。そんなありふれた一枚の絵画の一面のような光景の最中に、その花はあつた。いや花じやない。だだつ広いつばの帽子を被り、白いレースに覆われたドレスを手のつま先までつぱりと覆う彼女のその純白の姿は一輪の風にたなびくすずらんみたいで、けれど彼女は花ではなかつた。

彼女は花じやない。彼女は僕の ご主人様。

「暑いわ、かなた」

立つてゐるだけでも汗の滲む、それこそうだるよつた猛暑の最中、それはそうだろうと思わせるよつないでたちの彼女は言つた。声音だけはひどく涼しそうだけど、でも僕は特に反論もせず頷く。

「はい、王妃様」

異国から取り寄せたという片手で仰ぐには難しいほど大きな扇を両手でしつかりと持ち、彼女の斜め後ろから強すぎない程度に扇いでやる。勿論彼女は何も言わないけれど、斜め後ろから垣間見えるその面差しは気持ち良さそうに目を細め、どこか遠くを見つめていた。そんな彼女を見ていたくて、止めるといわれるまで扇いでいる、そんな気持ちが起こる。

現金なものだと、自分でも思う。最初はこんな女の命令をどうしてこの僕が聞いてやらなきゃいけないんだ、とよくよく憤慨しては彼女の侍女にたしなめられたものだ。それがいまや、こう。時の流れとは恐ろしい。奉仕にやりがいを見出してしまうなんて。一体僕はいつからこんな従順な詰まらない人間になってしまったのだろうか。それとも最初から、いや或いはこの僕の本質そのものがこうであつたと。

いやいやいやいやありえない。あつてたまるものか。僕は犬じやないぞ。

「うふふ」

頬をさらりと撫でるような、柔らかい笑い声。見ればいつのまにか彼女がこちらに振り返り、口元に手を当て綻んでいた。何事かと怪訝な目を向けてみれば、年頃にそぐわない悪戯を思いついた少女のような瞳が見つめ返してくる。

「かなた、可笑しいわ。貴方の百面相」

言いながらまた「うふふ」と撫つたそうに笑う。そんな彼女を見て不思議と胸のうちのどこかがうずくものだから、不本意ながらもどぎまきしてしまう。

大体、この人、なんなんだよ。それが大人の女のする顔か？ そんな女の子みたいな顔して、無防備に笑うんだ。歳は幾つだつたっけか？ ああ、そうだ二十歳、二十歳だ。僕と四歳も違う。僕からしてみれば、いや世間的な目から言つてももう立派な大人だ。大人の、はずなんだ。それなのになんでこう、瞬きしたら霞むんじゃな

いだろうかと思えるほど、儂く笑うんだ。その度に僕はなんともいえない気分になるつて言つのに、解つてているのかこの人は。解つていないんなら、なあ、それって大人つていえるのか？ 大人つて、まだ、そうなのか？ そういうものなのか？

僕にはわからない。まだ子供の僕には、一つたりとも、解るつていえるものが無い、んだ。僕にはそれがとっても歯がゆくつて、たまらないんだよ。胸の奥がむず痒くつて、でも届かなくつて、たまらないんだ。たまらない気持ちに、なるんだよ。 ねえ、王妃様。

そうなつたのは、今と同じよつな八月初旬。切ない蝉時雨に囲まれ、ギンギンに冷えた冷房の中で夏期講習を終え、うだるような暑さの中帰路についていた。そういう時。息苦しい暑さと灼熱の太陽から降り注ぐ忌々しい日差しに耐えながら一歩また一步と燃えるアスファルトの上を突き進んでいたとき、それは見えた。

陽炎。揺らぐその光景の中で一瞬垣間見えたその先にいたのは、時代錯誤な貴婦人。真っ白なドレスに白い日傘、クリーム色にたなびく髪。目の錯覚かと頭を振り再び顔を上げたとき、僕は居た。そう、その貴婦人の目の前に。すずらんのように儂く佇む彼女を目の前にして、僕は見知らぬ土地に呆然と立つていた。

それからはもう、意味が解らないことの連続だった。少女のようにはしゃぐ彼女に連れられ御伽噺の中でしか存在しないような城に連れられ、妙な格好をさせられ、「お前は今日からわたくしの小姓よ」などと台詞だけ聞いたら高飛車もいいところな宣言をうつとりと告げられ、有限実行その通りに教育され早一年。今コロ。

彼女の立場は王妃様らしく、そのとんでもない権限によつて僕は多くの人が望む地位にまんまと納まり三食宿付にありつけたつてわけだ。

最初は本当に意味がわからなくて、頭のおかしい外国人の女に拉

致されたと本気で思つていた。だつてありえないだろう。この僕が、小姓の衣装だとは言え、白タイツを履かされることになるなんて！すんごく気持ち悪かつた。特に股が。幸いその上に更に半ズボンのようなものを履かされたからもつこりは回避されたものの、その過程といつたら間抜けなことこの上ない。同級生に見られたら終生からかわれる事請け合いだらう。「冗談じゃない。僕にだつて男の面子というものがある。

それを、それをだ。あの人は解つていないんだ。屈辱的な格好をさせられた僕をしてあるうことが「まあカワイイ」だつて。可愛い。可愛いだと？ 男に向かつてあるうことが『可愛いい』！ そこでもつて鉄の鎖より頑強だと自負する僕の自制心も日ごろの鬱憤もあり盛大な音を立ててぶち切れてしまい、僕は果敢にも王妃である彼女に向かつて「ふざけるな！」と怒鳴つてしまつた。まあ、もちろん、それで済むはずもなく周囲の侍女と騎士達にお前がふざけるなど鉄拳制裁をこれでもかと食らつたのは数ある苦い思い出のうちの一つ。

そんなようなことを繰り返し、今に至る、僕。大人しくなるのだつて、そうさ、これは所謂処世術。また一步僕が大人に近付いた証拠だ。そう思えば、うん、まあ、仕方ないといつか、なんといつか。劣悪な待遇というわけでもなし、この格好さえ我慢していれば寧ろありつたけの幸運に恵まれているといつても違ひはない。

なんてつたつてこんなわけのわからない状態でさえ五体満足、精神的にも、まあリラックスとまではいかなくともそれほど苦にも思つていらない。今のところは。病氣もしていないし、仕事もこの一年で漸く一通りのことは覚えた。時々からかわれたりはするけれど侍女さんたちもそう悪い人はいないし、騎士さんたちにいたつてはまるで弟分のように僕を可愛がってくれる。何より男の憧れ、剣の修行ができるんだから、ものは考えようだ。わりとエンジョイしてゐるじゃないか僕、うん。

ただ、でも、憂いがあるとすれば数ある中から最たるもの上升

ると一つ。一つだけ。

王妃様。

彼女を一年間ずっと近くで見てきた。そんな彼女がなにかを憂いでいる。それに気付いたのが本当に、じく最近のことなんだ。

確かに、彼女には憂いがあった。いや、彼女自身の憂いというか、むしろ周囲の懸念があつた。それはほんの些細な一枚の葉ずれの音から木々のざわめきに発展するかのように、いつも不特定多数の声として彼女の耳に届いていた。例えばそれを彼女が煩わしいと少しでも感じていたらならそれは間違いなく憂いと取れる。

そうだ。その起因そのものが憂いなのかどうかなど、ただの前提でしかないんだ。

ある日彼女は僕にこう言つた。

「ねえ、かなた。貴方も、わたくしを可哀相だと思つてくれる?」

その日はひどく陰鬱とした雲が空に立ち込めていて、今にも降りそうな空模様だった。いつもの丘陵に見える、彼方の林はそのざめきの音が聞こえてきそうなほどゆらゆらと風に揺られ、何故だかとても不気味な様に僕の目には映つた。

そんな最中にいつも通りお茶の用意をさせた彼女は何故か僕以外の人間を人払いさせ、どこか遠くを見つめながらそんな事を問いかけてきた。

正直、困った。王妃様がなんの事を言つているのか、僕には解つたからだ。彼女は王妃様だ。でもそれは名ばかりの王妃様だと、みんな言つてはいる。何故かつてそれは、口にするのも恐れ多いことなのだそうだけれど、王妃様は未だ純白だから、だそうで。口にするのも恐れ多いとわななくその誰かの唇が能弁に語るには、王妃様はこの国に嫁いで三年なのだといつ。

そのとき僕は、「へえ、王妃様は十七歳のときに嫁いできたんだ。今の僕と一歳しか違わないじゃないか。大変だなあ」などと他人事もいいとこな感想を抱いていた、のだけれど。

その話にはまだ続きがあつて、なんでも王妃様はその三年間、つまり今までずっと、王様に召されたことが未だ一度としてないんだとか。

召されるつてなに？ と僕が聞くと、彼らはなんだかあまり気持ちのよくない薄ら笑いで、それが夜に王様のお相手をすること、つまり子作りのことだということを教えてくれた。なんだか僕はそれに興奮するよりも妙な嫌悪感を覚えてしまった。まだ見ぬ王様にでも、王妃様にでもない。そんな話を、つまりは、下卑た顔で自覚もなしににやにやと語るその人たちの表情、その人たちそのものにこそ、なにやら気持ちの悪い感情を抱いた。

けれどその人たちは僕のそんな感情に気づくこともなく、それどころかどこをどう勘違いしたのかもつと話を聞きたがつていると解釈して、聞きもしないことをペラペラと惜しげもなく語ってくれた。王妃様は純潔なこと。王様は王妃様に興味が無いこと。特に不能というわけでもなく側室、つまり愛人はいること。子供はまだ一人も生まれていないこと。王妃様は世継ぎをと周りにプレッシャーをかけられているということ。王妃様は純潔だから嫁いで以来白い服しかお召しにならないという噂。王妃様は実はどんなでもない淫乱だという噂。王妃様は母国で散々男盛りのついた方だったため王様が嫌悪して一度もお召しにならないのだ、という噂。

僕はそこまで聞いて席を辞した後、その足で信頼する先輩の騎士様のところへ向かい、その後半の話を余すことなく白状した。その騎士様は真っ赤になつて憤慨しどこかに行つてしまつたので、その後のことは僕は知らない。大して興味も無い。

ただそれには問題があつた。この話はここでもまだ、終わつていなかつた。

王妃様が、僕らの会話を聞いていたそ�だ。通りすがりだつたの

が、それとも何かしらの故意によるものだつたのか、それは知らない。けれど王妃様は確かに聞いていて、そしてその直後にこうして僕一人を残してこんな事を言つてきた。なんの事を聞かれているかなんて、解らないほうがおかしい。

けれど、ああ、どうしたものか。僕はどうしたらいいんだ。返答を間違えれば、この仕事を下ろされてしまうかもしれない。いや、それだけならまだいい。よくてクビ、悪ければ王宮追放で衣食住を失い、もっと悪ければ国外追放で寄る辺を失い、更にもっと悪ければ侮辱罪を問われて命を失う羽目になるかもしだれない。もしくは既にその中のどれかは決定事項かもしだれない。

ああなんてこつた。こんなことになるなんて。まさか「僕は知らなかつたんです！」王妃様の悪口なんて言つてません！」なんて言えるわけが無い。聞かれててもいなきことに勝手に答えるなど、この一年で散々叩き込まれた。それに、聞かれたことにはすぐに答える、とも。嘘も言つてはいけない。誤魔化しも許されない。

ああ神様、僕はどうしたらいいんだ。一体全体なんて答えれば、彼女は満足して全てのことを僕に限つて不問に処してくれるのだろう。

大体僕は本当に関係ないんだ。王妃様の噂がどうとか王様がどうとか可哀相だ何だつて言われたところで聞かれたところでどう答えろつて言うんだ。なんて言えば満足なんだ。どう言えば満足なんだよ。知らないよそんなこと。真偽がどうでもよければ真相もどうでもいい。僕はただなるべく平穏かつ楽に過ごしてそそこそいの思いをしたいだけだ。野心なんて無い、良心的で純朴ないい小姓じやないか。

なにが気に入らないんだよ。紅茶の入つたカップをソーサーに置くとき手が震えて力チカチ音がすることか？ それとも王妃様がなにか言うたびにいちいち顔色を伺つてしまふ事か？ しじうがないじゃん、紅茶零したらもつと怒られるし、大体王妃様何考てるかわかんないから話しかけられるといちいちびつちやうんだよ。こ

れの何が悪いってんだ。悪口なんかよりずつと可愛いもんじやないか。ああもう、どうしようってんだ！

「かなた」

「はいっ」

早く答える、と無言の圧を感じる。実際には王妃様はいつものように、けれどいつもとは違う陰鬱とした光景を眺めているから、斜めに控えている僕に王妃様がどんな顔をしているかなんてわからない。でも早く答えなくちゃ。答えないと不味い。

なんでもいいんだ、とにかくなんかよさげなこと。いや違うよくなくてもいいから悪くないこと。悪いってどんなことだ？ 王妃様が淫乱呼ばわりされること？ それだ！ それ以外、それ以外だつ。よし言え！

「かっ、かわいそうだと思う人が……ええーと、かわいそうなんじやあないでしょおーかっ」

マイガツ。何を言つとるんだこの口は。

案の定王妃様は意味がわからなかつたらしく、珍しくも僕に振り返りきょとんとした目を向けてくる。その表情がまるで少女みたいだ、とパーンくる僕の頭がそんな事を考えた。

いや違つ待て待て、主と直接目を合わせて会話しちゃいけないんだつた。目を伏せろ目を…

「かなた？」

「……はいっ、はい、あの、はい、いえ、ちがくて、えーっと」「うぐあああ。落ち着け僕つ。駄目だ考えがまとまらないってか何も考えられない。ひいいお助けえ。

「あのっ、えーっと、ですねえ……」

「ええ、なに？」

「お、王妃様は、『自身が可哀相だと、思つてこらつしゃるのかなーつて』

おーの一。何を言つとるんだパート？。

なにやら変な汗まで出てくる始末で、じつとり汗ばんだ両手を握

つたり離したり、僕の意思を表したように忙しい。次に続く言葉を失つてあわあわと目を泳がせている僕。

しかし不意に、風が吹いた。ふんわりと、花の匂いの乗つた、けれど生暖かく湿つた風。まるで雨が降る直前に吹く風のような不穏な心地のする風。

それが僕の頬を掠め、僕が顔を上げるか否かといつそのとき、僕の頤に固い何かが触れる。扇子だ。王妃様がいつも、片時も離さず、けれど一度として開いたことの無い扇子。それが僕の頤に、まるで風に誘われたように、すっと当たられた。王妃様が僕を真っ直ぐに見ている。彼女の美しい、けれどどこか空恐ろしいものを感じるその新緑の瞳が、僕を写していた。

「わたくしが、わたくしを可哀相、ですって？」

ぞっと、した。

おかしな話だろ？ 力で言えば、例え僕が成人していなくとも、彼女が僕に敵うはずも無い。それに危害を加えようとする気配も無い。それなのに彼女のその真っ直ぐすぎる眼差しに当たられたとき、身体中に張り巡らされた血管が凍つた。そんな心地がしたんだ。

きっと、返答を間違えば僕の想像よりも遙かに最悪な末路を迎えることになるだろう。そのとき感じた恐怖によつて、そんな直感が僕の中にもたらされる。最早冷や汗すら出てこない。儀礼的な話ではなく、今の彼女にこそ、嘘や誤魔化しは利かない。僕は僕の答えを告げることしか、許されてはいなんだ。

覚悟を決めるため、両手をぎゅっと痛いほど、握り締めた。

「僕は……僕は正直、王妃様が可哀相かどうか、わかりません」

扇子はまだ、引かない。この言葉だけではまだ足りないのだろう。喉が震えないよう、しつかりと慎重に、息を吸う。雨は、降つてしまふのだろうか。

「僕には、誰かが可哀相だと可哀相じゃないとか、考へている余裕が、ないんです。だから思うか思わないかと言えば、そういう意味で……王妃様を可哀相だとは思えません」

これは、本当のことだ。だって、自分で精一杯だよ。どうしてこんな状況で、こんな右も左もまだ手探りのこの状態で、誰かを可哀相だなんて思う余裕が出てくるだろう。

もつと本音を言えば知ったこっちゃないという話だ。今の僕の実といえば今すぐ自分の部屋にすっ飛んで帰り、「ご飯を食べて腹を満たしてすぐに安らかな眠りにつきたい。それから余力があれば起きてから風呂に入り、のんびりとした休暇を過ごしたい。そんなものだ。

それを今こんな身の毛もよだつような威圧感を僕に向かつて放っている彼女に解れなんて、天地がひっくり返っても無理だろうけど。

でも。

「 そう

「 どこか、ほつとしたようにそれだけ呟いた彼女は、何か思うように田を逸らした。それと共に頤に当てられていた扇子も外され、そして彼女はまたいつものようにいつもの景色に田を向ける。ほつとしたのは僕も同じだつたけど、ここで息をつくほど馬鹿でもない。王妃様の出方をどきどきしながら待つていると、王妃様は顔を逸らしたままポツリと 呟いた。

「 可哀相だと思われるわたくしは可哀相なのかと、思っていたの」

『思つてくれる?』と聞いたくせに、その言い方だとまるで可哀相だと思われたくないみたいじゃあないか。どっちなんだと内心げんなりしつつ、僕はじっと黙つた。多分、王妃様は僕なんかの相槌なんて、必要ないんだろう。いつだつて勝手に喋つて勝手に笑つて。

そういうえば今日は、笑つていしないな。天氣が悪いせいだろうか。相変わらず空はどんよりしてるけど、風は止んだようだ。なんだ、きまぐれな天氣め。降るなら降るで土砂降りにでもなつてこの状況を開、もとい有耶無耶にでもしてくれればいいものを。

そんなようなことを「こちや」「こちや」考えていると、案の定王妃様は

また勝手に咳く。

「早く世継ぎを、ですって。このわたくしによ？　どうひつりとこうのかしら。おかしなことを言ひづのよね」

なんだかそれがとても面白おかしそうに言ひながら、けれど王妃様は僕の方を向かずにつと彼方を眺めて言つた。というか、面白おかしいんじや、ないのかもしない。面白くなんかないことだ。だったらこれは、そうだ、自嘲　といづやつか。自分で自分を笑う。

「そうか。これは僕にだつて解る。王妃様は面白くなんて、ないんだ。」

「つまらないなら笑わないでください」

しまつた、と思いながらも、不思議と驚きは無い。それどころか僕の口は躊躇うことなくつらつら動き出す。

「僕は王妃様が可哀相かどうか解りません。でも王妃様がご自身を可哀相なのだとつておられるのだとしたら、それは可哀相なことなのだと僕は思います」

まるで読書感想文かなにかのよひ、抑揚なくつらつら語る僕の口。魔法にでもかかつたみたいだ。相変わらず心臓はぱくぱく胸打つていてるといふのに、一向に止める気になれないなんて。王妃様がか細い声で「なぜ」と咳いた今でさえ、まだ止まる気配は無い。

「自分を可哀相だと思うということは、そう思つてしまつほど、それほど辛いのかなつて。だったらそういう人ほど可哀相なんじやないかなつて、僕は思います。でも

「でも。僕は。

そよそよ揺れる、クリーム色の綺麗な髪。綻ぶ口元。ささやかに細められる、新緑の瞳。純白に包まれた、すずらんみたいなあなた。「いつも、笑つているときの王妃様は、楽しそうです。そんな人が可哀相だとは、僕は、思えないんです」

「こんな、答えでいいだろうか、とか。そんなこと忘れてこんなことを、言つてしまつたよ。だってそう思つたんだし、聞かれたんだ

から、いいよね。聞かれたことに答えただけだよ。文句を言つのはお門違いだよ。

今更な弁解を心の中でさやあさやあ喚きつつ、僕は漸く口を閉じた。じりじりしながら王妃様を斜め後ろからじっと見つめている、もとい注視していると、あることに気がついた。王妃様の肩が、なんだか震えている。顔も俯きがちで、見ると扇子までも両手で力を込めて握っているのか、白い手袋に皺が寄っている。

思わずぎょっとして言葉を失つた。震えるほど怒っているんだろうか。もしくはとんでもなく具合が悪くなつたんだろうか。だとしたら大問題だ。どちらにしても僕の生命の危機に直結しかねない問題だ。

心中には自己保身一色、失礼を承知でその面差しを覗き込もうと少し身体を傾けたそのとき、一瞬だけ、見えた。ぱたり、と扇子に跳ねて、白い手袋に滲んだもの。一瞬雨か、と上を見上げたけれどどうもそつではないらしい。それどころかあれだけ降るぞ降るぞと自己主張の激しかった空は、いつのまにか雲が散り散りになり所々に青空が覗き込んでいるくらいだ。

じゃあなんだ。そこまで思い至つて漸く僕はある一つの結論にたどり着き、すぐに身体ごと顔を後ろに逆転させた。

じつこうとき、どうしたらいのかわからない。解らないけれどじろじろ見るのはマナー違反、なような気がした。だから後ろを向いた。ハンカチを差し出せればパーfectだったのかもしれないけれど、生憎僕はハンカチを持ち歩くというスキルは未だ習得していない。これからも習得できるかどうか自信は無い。大体ハンカチつてどこで買うものなのかなつかえ曖昧だからそれを購入することさえ叶わないかもしない。

ああ、いや、だから落ち着け自分。とにかく、小姓たる僕がすべきことといえばそうだ、これだ。黙つて、じつと、主の望むままに。

それから、僕は彼女が泣き止んで僕に声をかけるまでじっと黙つてそこに突つ立つていた。僕の名誉を守るための言い訳を言え、つまり、主のプライベートを他者から守つていたんだ、僕は。

そうして彼女はお茶を入れなおしましょう、と僕に微笑みかけ、僕はというとそのいつもの微笑みにいつものように思つた。

ああ、彼女はやっぱりすずらんみたいで。『可哀相』なんて似合わない、って。

ところで、僕は後々とんでもないこと 例えば彼女が神様に愛された巫女だとかで気分によつて天気が右往左往されるというトンデモ超常現象体現の持ち主だということ、とか王様がそんな彼女を持て余していく扱いを測りかねてこんなことになつてゐる、だとか を知ることになるのだけれど、それはまた、別のお話。

今はとにかくお茶の時間。さて、まずは音を立てずにカップをソーサーに置くことから、習得してみようか。

彼女は今日もすずらんみたいに風に揺られ、そんな僕を見ていつのように笑つていた。

## 王妃様と僕 【異世界トリップ 小姓×王妃】（後書き）

スズラン（鈴蘭、英名：Lily of the valley）

別名：君影草、谷間の姫百合

有害物質を含み、特に花や根に多く含まれる。

花言葉……纖細、優雅、純潔、純愛、幸福の訪れ、意識しない美しさ。

参考……Wikipedia

## 激烈毒舌乙女、甘いものを拒絶するー【異世界トリップ・ファーストキス喪生

つまりは、乙女が初なる接吻においてうつとりする確立は、例え相手がうつとりものの美形であろうと五分五分ではないのかと、そういう言いたいものすごく短い話。勿論続かない。

## 激烈毒舌乙女、甘いものを拒絶するー【異世界トリップ・ファーストキス喪生

甘いものはだーい好き。甘いこともだーい好き。

ショートケーキが好き。真っ白なクリームの上にちょこんと乗つかるつやつや苺ちゃんが可愛い。イチゴって、漢字も可愛いよね。響きも可愛い。苺ちゃん見るたんびに、あーあ苺に生まれたかったあ、なんて思うよ。

モンブランもおしゃれでいいよね。ガトーショコラもちょっぴり大人のお姉さんちつくて素敵。ショートクリームは子供だよ。でもね、やつぱりみんなだーい好き。

あとね、甘いこともね、沢山好きなものがあるの。恋愛漫画が好きだし、恋愛小説も好きだし、ファンタジーとか、青春ものとか、ほのぼのとか、好きな。ハッピーエンドがいいよね、やつぱり。王子様と普通の女の子の恋とか、騎士様に守られるお話とか、もしくはすつじい魔法の力で守っちゃう側とか！

お話の中つて、だーい好き。どきどき、わくわくがこいつぱいで、きつとね、とつてもカラフルなの。きらきらしてて、魔法なんかほんわかわわーんって感じで、できないこともありますないこともないつて感じ。

だから私、夢のあるお話つて大好き。いつだって主人公が羨ましいつて、思つてたの。  
思つていた、けど。

でもね。

夢は夢の中だから、完璧なのよ。夢から覚めたら、それは可愛げも無い現実つてヤツ。甘くない、リアル。

悲鳴を上げたかつたけれど、喉が引きつって出でていなかつた。心底吃驚したときつて、動けないのね。

ていうか、この場合は違うかな？

がつちりホールドされてるっていうか、さあ。

「ううう、ああ、なんなの、これえ。

「逃げるな」

目が覚めたら、がつちりホールドでした。つて、なんのプロレス実況ですかこれえええ。

頭の中がしつちやかめつちやか、パニックどころか天地もひっくり返つてあーららこいら、ここはどい、私は誰？　みたいな。

ていうか、あなた、誰ですか？

「お前の夫だ」

ひいい良い声してるうう怖いよおお。

訳わかんない、なんで私を捕まえている人が夫なの？　ていうかほんとにここにど？　なんで私寝てるの？　上に見えるアレなに？天蓋？　なんかふわふわしてるし！　こべっど？

「闇だ。今宵、私とお前は眞のつがいとなるのだ」「

「つ、つ、つ、つ、つがひ？」

「つがい」

ナニソレなんのそれ訳わかんないよおお。解りやすく言い直してくれたところで言葉の意味が解らなければ意味が無いよおお。どんどん、どんどん、頭の中がぐつちやぐちやになつていぐ。あもうめちゃくちゃだ。何にも解らないの。

どうしてこうなつたの？　あなた誰？

怖くなつて身体を捩ると、その人の身体が離れる。と、思つたら両手をぐいっと掴まれて、顔の横に固定されちやつた。

「ひい」

情けない声を上げると同時に見上げると、私を見下ろすその人の顔をそのときやつと挿むことが出来た。

よく、見えない、けど。さらさらと流れる、黒いような、紺色の

ような、夜の空色の髪が頬に当たつた。その人は外国人みたいで、瞳が青いシルバーみたいに煌いていて、とっても綺麗だった。

「どうか、顔も綺麗。妖精の王様みたいな、くらくらする美人さん。

「て、なんでそんな人が私を見下ろしてるの？」

「妖精、か。私にはお前の方が、余程愛らしい妖精に見えるよ」ふと、眩暈がしそうなほど艶めいた微笑を浮かべて、その人がかがんできた。甘ったるいことを言つて何をするかと戦々恐々としていると、唇に、柔らかいもの。

なにをされたかなんて、そりやあ、馬鹿でもわかる。

「いつ」

「い？」

きょとん、と美人さん。

私の心中は、ずがーん、だあつ。

「いー やー あああああー！ 口づ、口くつつけた！ ちゅうした！」

「なんだ。口付けのことか？ つがいなのだ、驚くほどでも」

「おかあさーん！ おーかーあーさああああん！ この人が口くつつけた！ 気持ち悪いよおおおお！ おかーさーん！ おーかーあーさあーん！」

もー やだ。

なんなの？ なんなのこの人。口くつつけた！ 勝手にちゅうした！ なんか生暖かかった！

気持ち悪い！ 全然気持ちよくなんて無いじやんむにゅつてしてて気持ち悪いじやん！ 嘘つき！ なんか一瞬びたつと濡れたのが唇舐めたし！ あれ舌なの？ ディープキスつてやつ？

気持ち悪い！ 気持ち悪いよ！ お母さん！ お母さん！

「お、おい、どうした、なんで泣くんだ」

「触らないでよ気持ち悪い！ あたしに触らないで！ どうか行つて！ お母さん、おかあさん！ へつ、へつ、変態！ 部屋に変態が、変質者がいるの！ 口くつつけたの！ おかーさあああん！」

うわあああああんっ」

怖いよ。怖いよ。なんなんなんなんになれる。

なんでこんなに叫んでるのにお母さんこないの？　この人勝手に  
べたべた触つてくるし口くちづけてくるし詫わかなこと言うし  
怖いよ。誰か助けてよ。怖いよ。

うあああああん。

なんじ、じとを、叫んで泣いて。甘ったぬくない、異世界召還初  
日。

あたしは夫とか言う人を前にして、気持ち悪いを連呼して、気を  
失うまで思う存分泣き喚いた。

だつて、おかしいでしょ？

あんなに、きらきら、ふわふわしてた、砂糖菓子より甘ーいファ  
ーストキッスのイメージ。

それがものの見事に、粉碎されかけたんだもの。どんな乙女だ  
って、悲しくつて涙の洪水よ。

その時の私はもう甘いものなんて要らないー。そう思つほど、泣  
き喚いたんだからね。

夫なんてしーらない！　もう恋愛小説も漫画もココ、ココー。甘い  
ものなんて、だーい嫌いだつ！

激烈毒舌乙女、甘いものを拒絶するー【異世界トリップ・ファーストキス喪生

口くちつけたて、あーた。

## アモルの丞先 【異世界トリップ・B】の橋渡し?】(前書き)

メインではあつませんがボーイズラブ要素が含まれますので苦手な方はご注意ください。

## アモルの祖先 【異世界トリップ・BLの橋渡し?】

心はどうあるのだろう。

そんな疑問を浮かべたことはないだろうか。

心臓、脳みそ、果ては頭の上、なんて説もある。私はそれらが情操教育による賜物であつて、本来備わっているものではないんじゃないかつて、考へている。物を知り見聞を広げ教育を受け数多の感覚を手に入れる。それらの集大成が心なのだと捉える。

それらが何もなければ、心なんて生まれない。無機物と一緒にだ。呼吸をしているかしていないか、生命維持をしているかいないか、ただそれだけの違いしかないんじやあないだろうか。

それならば心の必要性とはなんなのだろう。生きるため？ 生命維持に苦も楽もなればそれを妨げる理由にも促す理由にもならないだろう。心の必要価値は何なのだろう。

その疑問への明確な答えは、いまだ現れない。それともこれは果て無き疑問なのだろうか。それこそ果て無き旅のように私の心が追いかけている。

そうだ。これは心そのもの、私そのものの存在理由を探す、果て無き旅なのだ。

『俺、渋谷が好きなんだ』

突然、彼がそんなことを言った。

そのときの私といえばカップ麺に丁度お湯を注ぎ終え、三分を測つていていたきだった。

そんな私の傍らで重々しく告白した彼は、何か重大な秘密を晒すように思いつめた表情を晒していた。ロケーションは、部室。他には誰もいない、私と彼の一人つきり。なかなかどうして、告白には適している。

だが私はそんな彼の決死の言葉に対し、言つべき言葉を失っていた。

それはそうだ。彼は男。私は生物学上一応女。そして彼の呼ぶ渋谷は私ではなく、彼の親友。そして私の記憶によれば私は彼の友人というより部活の仲間程度の付き合いでしかなかつたし、彼の親友と思わしき渋谷は生物学上確かに、男であった。

静まり返った部室にぽつりと転がつたその告白は、悲しいかな、耳を疑いようもなかつた。

そうか、あんた、渋谷が好きなのか。

で、何故それを私に言つ。

三分経つたか経たないか。恐らくは身を千切る思いでその告白をしだらう。彼にとつては、恐ろしく長い時間だつただらう。けれど不運なことに、彼は望んだ答えを得ることは出来なかつた。というか、私が彼に答えることができなかつた。二重の意味で。

「我が悲願を成就させよ。我是其の主なり。古のアモルよ、其の祖先にあるのが我が悲願なり。成就させよ。誓願せよ。我が名にかけて。其の魂にかけて。我是其の主なり。心の盟約を刻む同志なり」

「は？」

カップ麺を手にしたまま、軋むパイプ椅子に身を預け、私は飛んだ。果てすら凌駕する、その世界に。

どうやら私は飛んだらしい。飛んだといつても脳みその意味ではないし、なにかやばい薬を一発決めちやつたわけでもない。まあそれも確証がないので憶測から来る断定というか、願望でしかないけれど、どうにも実感が籠もりすぎているため事実を受け入れざるを得ない。

結論から言えばどうやら私は、誰かに呼ばれてしまった、らしい。死んだのかと思えば呼吸も脈も正常だし、寝食共につつがなく過ごしている。異常は感じられない。頭打つちやつてるのかとも考えたけれど、目の前の光景が私の妄想の産物としてもいやに精巧すぎて矛盾点が感じられない。その矛盾点すら私の脳みそが強制排除しているから見当たらぬだけなのかも、とも思つたけれど、こんな試行錯誤を繰り返すことこそ気が狂いそうだったので早々に事実を受け止めることにした。

真実がどうあれ今日の前で起つていて出来事から逃れようとしても所詮徒労で終わる。意思が脳に抗うことなど不可能だ。それなら適当なところで折り合ひをつけたほうが余程健全というものだ。そうでなければ気が狂う。もしくはもうそうなつていたとしても、妄想の中まで狂つてしまつのは遠慮したい。せめて自分が正常だと信じるくらいは許されねば、身が持たないというものだ。

さて、その受け入れた事実とやら。まずは始まり。

カップ麺を手にしたまま飛んだ私は腰をかけるパイプ椅子「」とそこに現れた。国名で言うならばアーテュース。王都は都、サリティウスの王城、地下の一室、隠された秘密の部屋。王室と限られたものしか入ることができず其の存在すら秘匿とされている、いわく付の部屋らしい。

真つ暗な石畳に覆われ下は黒い水にひたひたと浸かり、妖しいことこの上ない。円環状に明かりが灯され、その合間を縫うように等間隔で全身黒尽くめの人間達が立つっていた。その、私を囲んで。

あのときぶつぶつと何かを呟いていたのはその国の皇子であるらしく、私を召還した張本人でもあった。

彼らは私を囮んだまま言葉を交わし、意思と言語が通じることを確認すると、存外丁重にもてなしてくれた。訳もわからず困惑う私に暖かい食事と寝床、部屋と侍女を与えて、不都合など感じようもないほどのサポートを眺めた。そして目まぐるしい展開に私の頭がついていかず困惑している間何をせかすこともなく根気良く接し、また投げ出すこともせず付き合ってくれた。

こうまでされても話を見かないわけにも行かない。呼ばれ飛ばされ十日経ち、私はことのあらましをその私を呼び出したといつ皇子、ユスカ・ドル・リルクヴィスト本人から聞いた。

『我が悲願の成就を願う』

どこか遠くを見つめながら、心持思いつめたような眼差しで、彼はそう言った。

彼は私の名を聞かず、私のことをアモルと呼んだ。本当の名前を教えるのは契約を結ぶとき。今までは仮契約のままなのだそうだ。アモルとは古の名前であり、象徴なのだと。その名前こそが、彼の悲願を示しているのだ、とも。

「あれですか

「あれだ」

あれか。

それを見下ろし、息を呑む。思いもかけず、けれど確かに既視感をも覚えるそれを示され、何の因果か、と私は天井を仰ぎたくなつた。

つまり、その悲願は、居たわけだ。見方によればなんてことはない、よくある話なのだと思う。友人に相談する内容としてごく適切だ。強いて言うならば赤の他人、ましてや何の力も持たない一般人

である私に向けるには少々荷がかちすぎている気もしないでもない。それもまた、まあ、見ようによつては少々程度だ。なんだそんなことか、の一言のお釣りすら手向けることができる。

ただ、まあ、その、なんだ。ああ、酷く混乱している。

ここは現実か？ 夢なのか？ もしくは妄想か。過ぎたる問題を突きつけられ私は現実逃避を始めたとでも言つのか。現実逃避？まさか。逃避できないじゃないか！ むしろ悪化しているだろう！ 非効率にも程がある！ 無能な脳みそめ！

「どうした、アモルよ」

「……いや、ああ。はあ、少し、待ってくれ。少々、気が動転しているみたいだ」

「そのように見える」

「そうなんだ。うん、そつか。そうなんだよ。はあ」  
なにやら眩暈さえ起こしけ、目の前の窓ぶちに手をかけ身体を支えた。ひんやりと手のひらの温度を奪つていくそれの感触によつてますます頭だけが冴えていき、否応にも今自身に降りかかるすべての事柄が現実から由来しているのだと知らしめてくる。

「ああ、忌々しい。なんだと言うのか。これは私への、罰、なのか。あの時彼に応えられなかつた私への罰だとでも、言つのだらうか。

「アモルよ」

「……なんだ」

答えるまでのささやかな沈黙には話しかけてくれるな、という無言の抵抗があつたかもしれない。けれどそんなささやかな抵抗に、ましてや地位も権力も名誉も、ましてこの国では権限すら持ち合わせていない私に対する遠慮など、彼は与えてはくれなかつた。

それはそのはずだ。彼は私にその悲願の成就を示し、そうしてそれを私が叶えると信じている。いや、真偽の話ですらない。呼び出すことができたのだから、成就も絶対なのだと彼の中で証明されてしまったのだ。だから彼にとつて私の存在とは、それを成就させるためだけに在る。それだけなのだろう。

なんとも傲慢で残酷な男だ。そんな男に呼び出された私の恐怖と絶望を、誰が慮つてくれると言つのか。

ああ神よ、私はアモルではありません。それでも彼は私をアモルと呼ぶのです。

ああ神よ。私はアモルなどといふものすら知らないといふのに、彼は私がアモルたることを信じて止まないので。両者の矛盾が解消される日は来るのでしょうか。

ああ神よ。私はそれこそそれが成就するか破綻するかしなければ、未来永劫訪れるはないだろうと、そんな気がしてならないのです。

遠く想いを馳せこの理不<sup>死</sup>を嘆く振りをして現実逃避を測る私に、しかし皇子は慮ることもなく言つた。

「我が愛に試練は必要か」

神妙な顔をして物を言つこの皇子が酷く真面目なのだと言つ」とも、また始末に終えない。

「……それそのものが試練だとは?」

「さもあらん。言ひえて妙だ。流石はアモル」言つてくれるな。ここから飛び降りて何もかも忘れたくなる。試練とあらばまさに今このときこの皇子を相手にしていくことこそ我が最大の試練だろう。難問にも程がある。

「皇子はこの試練を、乗り越えたいと?」

その悲願とやらを絶対に成就させると?

オブラー<sup>ト</sup>に包んでそうにかこうにかそれだけ絞り出せた。彼は果敢にも頷いた。

「だからこそアモル、そなたを召喚したまで」

「試練とは己の力で乗り越えてこそとの覚えがあるが

「恐れを持たぬ御遣いよ。だからこそそなたを呼び出した。故にこそ在る我が手段なのだ」

つまり私の力を借りることも呼び出した自分の実力である。物の言いうにルールがないからこんなことになる。人類による言論

の規制の緩さの皺寄せが私にきているのではないか。不公平だ。ため息をつきたい気持ちを抑え、私は再びそれを見下ろした。彼の言ひ、その悲願を。

「私の意思を打ち負かす氣概があるならば神頼みなど無用だ」  
「無論だ。だがこうしてそなたはここにある。ならば為すべき」とを為せ。それがアモルの故、性、そして盟約なのだろう」「私はアモルではない。けれどそれを彼は許さない。ならば流れに従いその盟約とやらを果たさねばならない運命にあるのだろう、私は。例えその悲願が　アモルと称される私の人間性、価値観を搖るがすものだつたとしても。

その悲願、いやその歌謡いを見下ろし、私は覚悟を決めた。ならばこれもきっと定めなのだ。答えを出せと。応えると。やつこつことだ。

「解つた」

傍らに佇む皇子を初めて真正面から見つめる。精悍な面差し、思いつめた眼差しの先に見える揺るがぬ意思、そしてさらりとその奥に湛える灯火。私の一息で吹き消すことなど敵わない。ならば風を送り、煽つてやるまでだ。それが燃え尽きるか何かを為すかは、文字通り神のみぞ知る。私はアモル。神の御遣いだ。

「貴方が私を信じる限り、私も手を尽くそう」

「よからう。この悲願が果てぬ限り、そなたを信じる。……名を」名を告げれば、契約は成立する。そうなればそれが果たされると今まで、帰ることはできない。けれど契約しようがしまいが、結果は同じだろう。恐らくは私が答えを出すまで定めは変わらない。これはきっと私の旅の分岐点でもある。彼に応えることが出来なかつた私につきつけられた、試練。私はこの試練を乗り越えなければならぬ。彼のためでも皇子のためでもない、私の為に。

「……乾、灯架」

盟約が刻まれる。私は果たさねばならない。皇子の悲願。狂おしい恋に終着を。

これはある歌謡いに恋焦がれる一人の皇子の物語。私はその導き手。私の名はアモル。アモルとは古の名。それは最古を生きる神の御使い。生きとし生けるものが思い煩う永遠の病を昇華する、天使の名だ。

愛に性差はあるものか。その命題に取り組むべく私は呼ばれた。

皇子は男。

私は女。

彼は男。

渋谷は男。

歌謡いは

男。

疾く応えろアモル。これは愛の命題である。その予先にかけて应えよ。アモル。

## アモルの丞先 【異世界トリップ・BLの橋渡し?】（後書き）

恐らくまるで意味が解らなかつたであらう全閲覧者に向けてと見せかけて技能の無い丁寧をフォローするためのにすやん風解説

大学一年生の乾灯架はある日同じ部活に所属する同級生より同性愛を力ミングアウトされて『ちょ~~~~』とか思つてゐる間に異世界召還されて『ちょ~~~~ま~~~~』とか思つてゐる間もなく皇子様に『俺とアイツの仲をアーッしてくれ（BL的な意味で）』と言われ『うは~~~~拒否権無し~~~~おk~~~~』となりました  
今□□

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3338n/>

---

やりっぱなし短編集

2011年1月20日20時55分発行